



農協は地域に何ができるか ——JA秋田やまもと(下)

ゲスト／竹内 孝一(秋田県JA秋田やまもと 代表理事組合長)

第43回ゲスト

秋田県JA秋田やまもと 代表理事組合長
竹内 孝一



たけうち・こういち

1958年秋田県生まれ。88年旧琴丘町農協に入組。99年山本郡5JAが合併しJA秋田やまもとの誕生後、総務課長、金融課長、人事課長を経て2011年に企画総務部長。2014年常勤監事、20年監事、23年に理事に就任し、代表理事組合長に選任された。水稻、そら豆などを育て、出荷している。

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授
京都大学学術情報メディアセンター研究員
石田正昭



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。

* 前回の記事は[コチラ](#)から

農協は地域に何ができるか——J A秋田やまもと

J A秋田やまもとでは全国屈指の食農教育活動が展開されている。それを支えているのは女性部、青年部、生産部会のメンバーたちであるが、事務局をあずかる企画審査課の獅子奮迅の活躍も見逃せない。今回は、食農教育活動を育んできた「食農実践会議」の設立経緯を踏まえて、経験豊富なその内容を竹内組合長に語ってもらった。

■ 地産地消を軸とした食農教育活動

石田：貴J Aでは食農教育活動がものすごく盛んですが、その始まりはどのようなものでしょうか。

竹内：わがJ Aは平成11(1999)年1月1日に設立されましたが、設立間もない平成12(2000)年に「J A秋田やまもと食農実践会議」が発足しました。

この組織は地産地消の展開により、子どもたちに安心・安全な食べものを届けたい、あわせて食農教育活動を行うというものです。構成員は約130名で、J A職員のほか、エコファーマーや特別栽培米の生産者、女性部員、新規就農者、郷土料理の伝承人、学校給食食材提供者などで構成されていました。

代表者は初代組合長の袴田一憲さんで、仕掛人は泉牧子さんというパワフルなJ A職員でした。彼女を軸に、たとえばシイタケでも外国産はちょっと危ないよねとか、シイタケやじゅんさいなど地元食材にこだわって食べようねといった運動を開始したのです。

その運動が県内外で広く認められて、平成17(2005)年度開催の第1回全国地産地消推進フォーラム(地域振興部門)で農林水産大臣賞を受賞しました。現在のJ Aあげての食農教育活動の展開は、この食農実践会議のなかで培われたものと考えています。

泉さんは、秋田県立農業短期大学農村生活科の卒業生ですが、野菜ソムリエや



「豆板醤」だけでなく、新たに「豆板醤たれドレ」(写真右)を秋田県立大学と開発。7月から道の駅等で販売を始めた





食農サポーターは、年数回、グランママシスターズの歴史や食農活動の重要性を学び、実際に郷土食の作り方の講習を年数回受ける

食育インストラクターの資格を持ち、ここを退職してからはＪＡ全農秋田県本部、次いで秋田県立大学地域連携研究推進チームの地域コーディネーターとして活躍しました。

現在は県立大学を定年退職し、県家の光講師として活躍しています。食農教育の話であれば、1、2時間くらい平気でしゃべりますよ。いい話をいっぱいしてもらえます。

あとでお話したいと思いますが、そら豆農家のお母さんたち手仕込みの「まごころ豆板醤」のパッケージデザインを秋田県立大学の学生さんたちに考えてもらうなど、地域連携のとりくみも数多く手がけました。

また、郷土料理の传承人グループは「伝統食名人・グランママシスターズ」と呼ばれていますが、これを立ち上げたのも彼女です。グランママシスターズは郷土料理の実演会やレシピ集の作成など、地元食材を利用した郷土料理の伝承や普及活動を行っています。

ただ、設置当初に17名いた名人は高齢化などで5名に減ってしまい、継承が危うくなってきましたので、現在では名人といっしょに活動しながら知識や技術を習得する食農サポーターの養成研修を行っています。

もう1つ、平成19(2007)年3月に本店敷地内にＪＡ版コンビニ「ＪＡンビニＡＮＮ・ＡＮ」をオープン



企画審査課がコーディネーターとして、時には講師にもなりながら、グランママシスターズ、食農サポーター、女性部、青年部と協力しながら、食農体験教室を開催している

ンしましたが、この立ち上げに奔走したのも彼女でした。令和2(2020)年4月、J Aの手を離れて新生J AコンビニANN・ANがスタートしましたが、そのお店を運営したのも彼女が代表を務める農家の女性グループ「べっけANN・AN」でした。

べっけ(別家)とはJ Aを「本家」として名付けられたもので、7種類の具が楽しめるご自慢のおにぎりや、弁当・総菜、それに人気商品の米粉パン(コメワッサン)や焼き菓子なども、すべて店内で手づくりしていました。ただ、べっけANN・ANの運営も令和4(2022)年4月で終了しています。

■ 小学生の発表に感動

石田：広報誌『五ツ星』令和7(2025)年3月号に、令和6年度の「食農活動この1年の歩み」が掲載されています。わたしの計算では、管内の保育園・こども園、小・中学校で食農体験教室を合計55回開催し、延べ1,131名の子どもたちが参加しました。これってすごくないですか？

竹内：おっしゃるとおり、すごいです。それを企画総務部企画審査課が一手に引き受けて実施しています。現在、支店は北部地区の八峰支店だけとなりましたので、すべて本店対応で行っています。

年度初めに、こういうことができますよという形で、すべての保育園・こども園、小・中学校にメニューでお示ししています。

石田：教育委員会ではないんですか？

竹内：ええ。保育園・こども園、小・中学校に直接お示ししています。

企画審査課は融資審査(2次審査)と生活指導(女性部事務局を含む)の両方を担当していますが、そのうちの生活指導というか、食農体験教室の担当者は3名です。ただ実務は担当者1名で回していて、本当はもう1名増やしたいところですが、適任者はまだみつかっていません。

対象校は減る予定です。南部地区の三種町では、令和8(2026)年度から中学校が1校に、令和9(2027)年度から小学校が3校になります。それに伴って管理業務も軽減されると思います。すでに北部地区の八峰町では統合が進み、小学校が2校、中学校が1校となっていますが、生徒数の減少からもう一段の統合が必要となるかもしれません。

石田：保育園・こども園、小・中学校にお示しするメニューはどのようなものでしょうか？

竹内：巻きずし、そば打ち、豆腐づくりとおからのドーナツづくり、じゅんさいの摘み取り、じゅんさい鍋、だまこ鍋、きりたんぼ鍋、梅ジャムづくり、米粉のどらやき、りんご・なしの摘み取りなど、多すぎて全部は思い出せません。豆腐づくりは大豆を植えるところから始めます。



取材当日は悪天候にもかかわらず、昼食に女性部の有志（グランママシスターズ）が郷土料理の「だまこ鍋」をふるまってくれた

今日のお昼に女性部リーダーさんにつくっていただいたのが、だまこ鍋です。きりたんぽ鍋と並んで秋田の郷土料理です。

石田：おいしくいただきました。ありがとうございました。

竹内：食農体験教室とも関係しますが、今年3月（令和7年3月19日）に「J A 秋田やまもと家の光と食と農のセミナー」（主催：J A 秋田やまもと食農実践会議）が開かれました。正直これには感動しました。

とくによかったのは琴丘小学校5年生のみなさんが「三種町の農業を考える」をテーマに7グループに分かれて、スマート農業や後継者不足、お米の栽培や加工など、営農指導員から学んだこと、さらには自ら調査したことを小学生の目線で発表してくれたことです。

わたしのおじいさんの一日、という発表では「毎日、朝早く起きて田んぼに行っています」というような話を、模造紙に絵と文を書いて報告してくれました。わたしだけではなく、来た人みんなが感動していました。食農教育の一つの集大成を得た気分になりました。

石田：この種のセミナーは今後も続けてほしいですね。

竹内：わたしもそう思います。食農教育活動の事務局の企画審査課ですが、課長の篠田康子さんは金融課長の経験者でもあります。もともとは生活指導員で、そのための資格も持っており女性部のみなさんとは旧知の間柄です。彼女にうってつけの役柄といってよいでしょう。

石田：まさしく「二刀流」ですね（笑）。



食農教育を受けた、管内の小学生による報告発表は非常に感動的であった

■ 女性部・青年部を誇りたい

石田：わたしも審査員を務めました。令和4(2022)年2月開催の第63回全国家の光大会では、女性部の伊藤ユウ子さんが記事活用の部で家の光協会会長特別賞を、また企画審査課の北林綾子さんが普及・文化活動の部で全国農業協同組合中央会会長賞をお取りになりました。コロナ禍でウェブ開催となってしまったのは残念でしたが、1つのJ Aから全国大会受賞者を同時に出したのは画期的なことです。

竹内：名誉なこと。女性部では東京に応援に行こうねと話していたのですが、残念でした。

石田：伊藤さんは、規格外のそら豆からつくる豆板醤の開発秘話、J AンビニANN・ANNの創意あふれる運営、女性部役員による『家の光』の普及推進などを語ってくれました。

竹内：伊藤さんはもともとJ A職員でしたが、就農後は女性部の部長、J Aの理事などを務められたJ Aの功労者です。特別栽培米を生産していて、特裁米基準で秋田県から栽培が認められる「サキホコレ」にわがJ Aで最初に取り組みました。

石田：北林さんは、担当している食農体験教室や女性大学のとりくみ、伊藤さんの発表にも通じますが女性部役員による『家の光』の普及推進、それに『家の光』の記事活用による女性部員の拡大とそれによる女性正組合員・女性総代の拡大など、女性部事務局の一員として活躍している姿を語ってくれました。

竹内：伊藤さん、北林さんの発表にあるように、女性部役員による『家の光』の普及推進によって、新規、継続件数ともに大きく伸びました。職員普及だけではどうしても限界がありますからね。

石田：昭和30年代までは農協婦人部の女性たちが普及委員(職員)といっしょになって『家の光』の購読の勧誘、雑誌の配布を行っていました。現在はむずかしくなっているようですが、それを再開できたのはJ AとJ A女性部の近さの表れ



「劇団そら豆」の劇に、常勤役員も出演することによって、より組合員との距離が縮まる

だと思います。

竹内：そのとおりです。女性部はわがJ Aの誇りです。

伊藤さんの発表した女性部の「豆板醤づくり」ですが、原料のそら豆は琴丘地区の転作作物として導入されたものです。わたしもそら豆部会の一員ですが、昨年その部会が「劇団そら豆」を結成しました。

石田：すばらしい。どこから刺激を受けましたか？

竹内：刺激を受けたというよりも、琴丘地区には筆達者な人がいたことが関係しています。田中国光さんといって「そら豆情報」を書いて、それを部会員に配布してくれます。読むだけでも楽しい情報紙ですが、その彼が劇団そら豆の台本を書いています。

そら豆部会自体すごく仲がよく、夫婦いっしょに参加しましょうということで始めました。でも、みんな素人ですから恥ずかしいじゃないですか。うまくできるかどうかも気になって…。

しかし、田中さんはそんなこと関係ないよ、うけなくてもいいんだよ、やる人が楽しめればいいんだよ、といってくれました。そんなことで少し気が楽になりました。

お披露目公演は今年のJ Aまつりで、「唐比の春」という品種と「かのみどり」という品種が結婚するというストーリーです。そこに呼ばれて、わたしのほかJ Aの常勤役員3人(常務理事2名と常勤監事)も登場しました。今年は孫が生まれて、孫祝いをやって、最後はコメ騒動で終わる、というストーリーの3部作でした。やってみると思いのほか楽しめましたね。

石田：演劇はどうしても共働が必要になるので、仲間の結束力を高めるのにはいちばん適しています。

竹内：劇団そら豆を結成したのは、生産者を増やしたい、そら豆部会員を増やしたいという思いからです。仲もいいし、入りやすいですよとアピールしたかった。その甲斐あってか、今年から生産者が1名増えました。そのほかにも2名が興味を持ってくれています。

石田：大成功ですね。

竹内：もう1つですが、いま青年部が新たに仕掛けている食農教育があります。名付けて「A. I. E (Agriculture in Education)」。訳して「教育に農業を」というものです。農業の教育ではなく、教育に農業をとり入れるというのが肝心かなめのところですよ。

石田：発想がすばらしい。

竹内：令和5(2023)年度秋田県J A青年大会の主張発表で、青年部代表で出場した八竜支部の関駿介さんが見事、最優秀賞に輝きました。教育の場に農業を積極的に組み込むことを提案し、青年部が行っている農業体験学習などを通じて

「A.I.E」を広げることの重要性を語りました。

彼自身は米とキクをつくっていますが、自分の田んぼを提供して子どもたちに稲刈り体験をさせたり、夏休みちゃぐりんフェスタでは地域の農産物の特徴をクイズ形式にして紹介したりしています。

秋田大学教育学部を卒業しているだけあって、教育に対する考え方がしっかりしていますし、教え方、しゃべり方がとても上手です。子どもたちはもちろん、保護者からも大きな反響をいただいています。JAとしても今後これを大きく育てていきたいと考えています。

石田：期待しています。



青年部の関駿介さんは、「夏休みちゃぐりんフェスタ」の講師を務め、地元の小学生に、地域の農産物の特徴などをクイズにしたり、実際に栽培しているトマトやお米について紹介してくれた

ドラゴンフレッシュセンター

ドラゴンフレッシュセンター——JA秋田やまもとの農産物直売所である。

開店は平成6(1994)年3月31日で、旧八竜町農協が設置した。土地は旧八竜町(現三種町)の所有で、店舗を旧八竜町農協が建て、運営は「まごころの会」が担っている。

「まごころの会」は直売所の出荷者たちで構成されているが、女性部のメンバーとほぼ重なり合っている。レジに立つのも「まごころの会」のメンバーである。家賃は固定資産税相当額と格安で、改修工事費もJA

が立替えた後に「まごころの会」が支払った。

ドラゴンフレッシュセンターと名付けられたのは、当時の町名、農協名の「八竜」にちなんだもの。八竜とは、この地域に伝わる「八竜伝説」に基づいている。開店当初は大型直売所が少なかったことから、県内でも1、2を争う直売所であったという。

現在の売上高は2億1,000万円で、管内人口(三種町、八峰町)の2.1万人からみて妥当な大きさであろう。ただ近くには中核都市の能代市があって、そこからの入込客も多い。

主力商品は砂丘地で育てられたメロン(八竜メロン)で、年間6,000万円の売上高がある。八竜メロンの生産額は約4億円と見込まれるが、かつては15億円にものぼり、米をのぞいて管内最大の生産額を誇っていた。生産額減少の主な要因は高齢化で、メロンのような重たいものは高齢者に大きな負担となる。

ドラゴンフレッシュセンターの棚には、初夏を彩るメロンのほか、季節の野菜や加工品、お弁当、お菓子などが途切れることなく並んでいる。とくにお母さんたちの情報収集力と実践力が優れていて、見たことのない野菜や、新しいものが次から次へと棚に並ぶことがここの特徴という。

もともと自分名義の通帳をつくり、自由に使えるお金を持ちたい、というお母さんたちの切なる願いから始まった農産物直売所。ドラゴンフレッシュセンターにはその原点がいまも残っている。



ドラゴンフレッシュセンターの運営も自分たちでおこなう